



草原の里 100 選の取組みと 全国の草原の里

草原保全に取り組む団体は、火入れや刈取り作業の担い手不足や、農畜産業や地域社会の沈滞などどこも同じような悩みを抱えています。全国草原の里市町村連絡協議会は草原を持続可能な社会を実現する「共創資産」ととらえ、2022年から毎年、各地で育まれてきた草原に関わる知識や技術、人々の想いを共有し、次世代に継承することを目的に「未来に残したい草原の里」を選定しています（<https://sato.sogen-net.jp/>）。2022年には37、2023年には14の里が選定されました。環境省と農林水産省もこの事業を後援しています。

長野県では2022年に開田高原（木曾町）、2023年に菅平高原・峰の原高原（上田市・須坂市）、霧ヶ峰（諏訪市・茅野市・下諏訪町）が選定されました。毎年秋に東京農業大学で認定証授与式（写真）と記念フォーラムが開催され、オンラインでも配信されました。フォーラムでは毎回選定された里の中からいくつか事例報告が行われますが、長野県の里はすべて事例報告を行っています。また全国草原の里市町村連絡協議会の事務局は2023年から長野県小谷村です。

2022年に選定された草原の里に対しては、各里の歴史や景観、利用と管理の現状等をまとめた冊子『未来に残したい日本の草原』が作成され、昨年クラウドファンディングで発行されました。2023年も同様にクラウドファンディングが実施され、12月に成功しました。昨年10月から今年1月に第3回の募集が行われ、5月に選定結果が出る予定です。

本特集では、県内の草原保全活動を応援すべく、冊子『未来に残したい日本の草原』から全国の草原の里の実態を紹介するとともに、県内3つの里と小谷村から草原とその保全活動をご紹介します。



2022年草原の里100選認定証授与式の様子

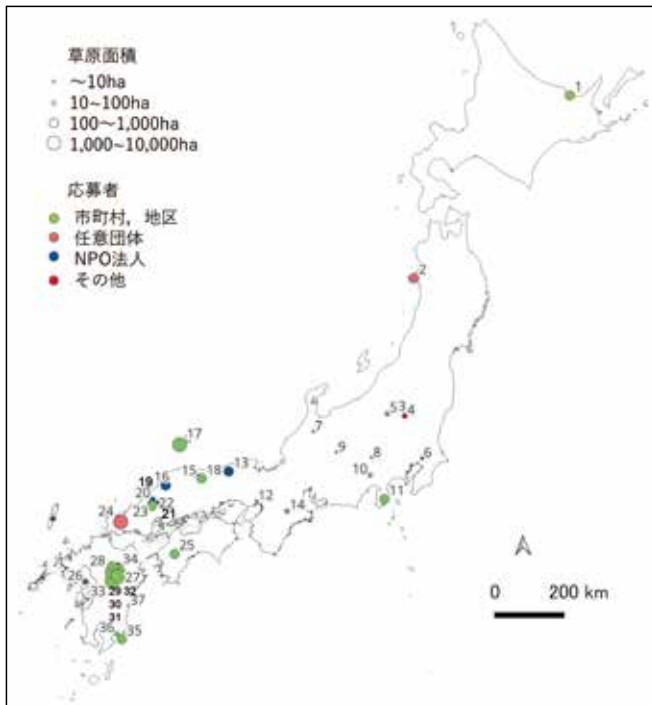


図 2022年に選定された草原の里
『未来に残したい日本の草原の里』を用いて作成。
番号は表に対応。

■多様な価値を持つ全国の草原

草原の里は北海道から九州まで広く分布し、西日本に比較的多くあります（図、表）。草地面積は阿蘇や隠岐では1000ha以上の大規模なもの、関東甲信越や近畿地方では10ha以下の小規模なものが多い傾向があります。応募者は市町村や地区が16（43%）、任意団体が11（30%）、認定NPO法人が8（22%）、その他が2（5%）でした。応募者は草地面積の大きな里では市町村、小さな里では任意団体が多い傾向があります。

各里では様々な取組みが行われていますが、主なものに注目すると、A 農畜産型（7）、B 観光型（11）、C 自然再生型（11）、D 教育型（6）、E 伝統文化型（2）に分けられます。Aは農畜産業の維持が草原保全につながるもの、Bは草原を観光資源として活用するもの、Cは自然再生を通して地域振興を目指すもの、Dは自然体験や環境教育の場として草原を活用するもの、Eは伝統文化の継承を目的としたもの。

NO	草原の里	市町村名	応募者	類型*	火入れ実施		農畜産利用				環境保全・再生活動						
					主体	ボランティア	放牧	飼料	肥料	茅	希少種生息	草刈り	雑木処理	外来種駆除	シカ害	モニタリング	
1	小清水原生花園	小清水町	市町村	B	市町村	○	○					○			○		○
2	寒風山	男鹿市	任意	B	住民	○						○	○		○		
3	土呂部の茅場	日光市	任意	C				○	○			○		○			
4	日光市霧降高原キスゲ平園地	日光市	財団法人	B								○	○			○	
5	入会の森「上ノ原茅場」	みなかみ町	任意	D	市町村						○					○	
6	武西の原つば	印西市	NPO	D								○					○
7	五箇山菅沼茅場	南砺市	任意	E					○	○							
8	乙女高原	山梨市	任意	D								○				○	○
9	開田高原の半自然草地	木曽町	任意	E	住民		○	○	○		○	○					
10	朝霧草原	富士宮市	地区	B	住民	○					○						○
11	稲取細野高原	東伊豆市	地区	B	住民					○							○
12	東お多福山草原	神戸市、芦屋市	任意	D						○	○	○					○
13	上山高原	新温泉町	NPO	C	協議会		○				○		○		○	○	
14	曾爾高原	曾爾村	任意	B	住民						○					○	○
15	鏡ヶ成草原	江府町	協議会	C	協議会							○	○				○
16	三瓶山西の原・東の原・北の原	大田市	NPO	C	市町村		○	○			○						○
17	隠岐郡西ノ島町の草原	西ノ島町	市町村	B			○				○						
18	蒜山高原	真庭市	市町村	C	住民	○	○				○	○					
19	深入山	安芸太田町	市町村	B	市町村						○	○					○
20	雲月山	北広島町	NPO	C	住民	○					○						○
21	千町原	北広島町	NPO	C							○	○					○
22	広陵学園芸北文化ランド茅場	北広島町	NPO	D					○	○							
23	八幡湿原群	北広島町	NPO	C									○				○
24	秋吉台	美祢市	任意	B	市町村	○	○	○	○		○					○	○
25	大野ヶ原	西予市	市町村	A			○	○			○						
26	奥雲仙田代原草原	雲仙市	NPO	C			○				○	○	○				
27	阿蘇・阿蘇市の草原	阿蘇市	市町村	A	住民	○	○	○	○	○	○						
28	阿蘇・南小国町の草原	南小国町	市町村	A	住民	○	○	○	○		○						
29	阿蘇・小国町の草原	小国町	市町村	A	住民	○	○	○									
30	阿蘇・産山村の草原	産山村	市町村	A	住民	○	○				○						
31	阿蘇・高森町の草原	高森町	市町村	A	住民	○	○	○	○	○	○						
32	阿蘇・南阿蘇の草原	南阿蘇村	市町村	A	住民	○	○	○	○	○	○						
33	吉無田高原	御船町	市町村	B	市町村	○											
34	くじゅう飯田高原	九重町	任意	C	住民	○	○	○			○			○			○
35	都井岬	串間市	市町村	B	住民	○	○				○						
36	笠祇・古竹草原	串間市	市町村	C	住民	○		○	○		○						
37	川南湿原植物群落	川南町	任意	D	NPO				○		○						
					25	16	17	12	12	13	24	12	6	3	7	16	

※A：農畜産型、B：観光型、C：自然再生型、D：教育型、E：伝統文化型

表 草原の里(2022年選定)の類型、火入れ、農畜産利用、環境保全・再生活動『未来に残したい日本の草原の里』を用いて作成。

るもの、Eは伝統文化を継承するために草地を維持するものです。Aは阿蘇、Dは都市部周辺に多くみられます。阿蘇ではあか牛を放牧し、牛肉を食べる取組みを推進したり、野草堆肥を用いた農作物をブランド化したりしています。新たに文化財の修復に用いる茅の生産を始めた地域もあります。EのNo7は合掌造り民家、No9は木曾馬に関わる文化継承を目的としています。

火入れをしている里は25(68%)あります。火入れの目的は18が農畜産利用で、4つが観光資源としての景観保全、3つが生物多様性保全です。火入れの主体は地域住民が16、市町村が6でしたが、協議会

やNPOもありました。16の里がボランティアを受け入れていました。

希少種が生育・生息する里は24(65%)あり、その保全のために刈取りや雑木処理をしている里は14、外来種駆除をしている里は3つありました。動植物のモニタリングをしている里は16、シカの食害防除に取り組んでいる里は7つありました。市町村や地域住民を含む協議会が設置されている里は13ありました。

草原が多面的な価値を持つことを背景に、都市住民も巻き込んだ形で草原を保全・再生する活動が広まりつつあります。(浦山 佳恵/自然環境部)